

じいちゃんとおぼく

服部 蒼

「蒼くんはじいちゃんの宝じや。」

ぼくをひざに乗せて、ニッコリわらいながら言うじいちゃん。小さいころから何度も言われた言葉だ。

ぼくはじいちゃんといっしょには住んでいないけれど、「おーい。じいちゃん。」

とまどを開けてさげれば、じいちゃんに聞こえる近さに住んでいる。だから毎日と言っていくくらい会っていて、ぼくはいっしょに住んでいる家族と同じだと思っている。

お母さんは正社員で働いていて、ぼくは0才のころから保育園に通っていた。じいちゃんは帰りのおそいお母さんに代わって、毎日むかえに来てくれていた。ポケットにはいつも「あめ玉」を入れていて、帰りの車の中でそれを食べるのが楽しみの一つだった。

小学校に入った年の秋、じいちゃんが入院した。すごく元気だったのに。ぼくは心配になってお母さんに

「ねえ、じいちゃん、すぐ帰ってくるよね。」

と聞いた。すると、「ちよつと時間がかかるかもしれないけど、元気になって帰ってくるよ。」

と教えてくれて、ぼくはホツとした。でもある日の夜、お母さんが外でかくれて泣いているのを見ってしまった。どうしていいか分からなかった。ぼくは、なみだに気がつかないふりをした。

じいちゃんは死んじやうのかな、いや元気になるよ、不安な気持ちでその日はなかなか眠れなかった。

「おーい。早く座って食べえよ。今日は蒼の好きなステーキじや。」

ぼくは今、四年生の夏休みの真つ最中だ。昼ごはんはじいちゃんが作ってくれている。ぼくがたくさんおかわりすると、じいちゃんはおうれしそうに目を細めて笑っていた。

じいちゃんは二度手術をして、病気に負けないで帰ってきてくれた。そして今もぼくの世話をしてくれる。元気になってからは、校門の外へ毎日むかえに来てくれるようになった。家が遠いせいもあるけれど、雨の日、暑い日、寒い日と、歩くのがいやになる道のりを車で帰れるぼくのことを、お母さんやお姉ちゃん達は「かなり甘やかされている。」と、口をそろえて言うようになった。でも仕方ない。だって、ぼくはじいちゃんの宝なんだから。

空を見上げるといつも思う。じいちゃんは天気みたいな人だと。太陽のようにわらうじいちゃん。嵐の雷のようにドカーンとげんこつを落とすじいちゃん。ぼくがかぜを引いているとくもり空のように心配するじいちゃん。どんなじいちゃんも大好きだ。まだまだ長生きして、ぼくの成長を見守ってほしい。はずかしくてなかなか言えないけれど、いつも思っているんだ。

「じいちゃん、ありがとう。」
言葉にして伝えるから待っていてね。